

ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「私たちのマンガ史」は、東京都江東区・森下文化センターにて2016年10月21日（金）から30日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「私たちのマンガ史」で展示した展示物を再構成したものです。

**私たちのマンガ史**  
マンガ家デビュー秘話

1970年代初頭、マンガ家になることを夢に見て、その夢に全力で向かっていったマンガ少年たちがいた！

マンガ家としてデビューしたのか？  
それとも、しなかったのか？  
パネル展示と当時の原画、掲載誌、資料等で今だから語れる、それぞれのマンガ史をご覧ください

手塚治虫の「マンガの描き方」  
石森章太郎の「マンガ家入門」  
雑誌COMの創刊、サンデー・マガジンの大ヒット  
少年ジャンプ創刊、手塚賞・赤塚賞新人賞へ投稿……

イラスト：KINKAN

入場：無料

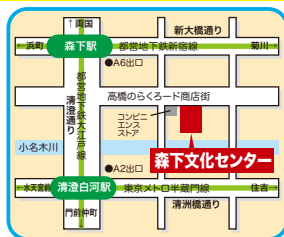
日時：10月21日（金）～10月30日（日）  
午前9時より午後9時まで（最終日は午後5時まで）

会場：森下文化センター1F展示ロビー

お問合せ：森下文化センター

〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17  
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677  
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分  
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分  
<http://www.kcf.or.jp/morishita/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター







■ 私たちのマンガ史

# 篠原幸雄

デビュー作

『悪魔の水』

1970年「少年ジャンプ」



デビュー作『悪魔の水』が掲載された  
「週刊少年ジャンプ」1970年第38号  
(集英社刊)

マンガの持ち込みを始めたのは、高校二年ぐらいからです。行ったのは集英社と秋田書店、それに少年画報社と「ガロ」の青林堂。集英社では、新宿のマンガ喫茶「コボタン」でお会いした「少年ブック」の編集者の角南（すなみ）攻さんのお世話になりました。のちに「少年ジャンプ」に異動して『トレット博士』のスナミ先生のモデルになった人です。彼はまだ駆け出しだったので、「少年ブック」の読者コーナーを担当していたんです。そのコーナーの書き文字を発注してくれました。秋田書店では、単行本の部署でカットの仕事をしていました。釣りの入門書で、魚の絵を描きました。僕は絵が下手だったんですよ。そんな僕でもできそうな仕事をまわしてもらいました。ギャラもいくらかいたでいて。優しいですよ。



そのままプロになることは信じて疑わなかったです。どこからそんな自信が生まれたのか、今になると分かりません。なので、大学なんかに行くつもりはなかった。でも親が不安だったので、東京デザイナー学院のグラフィックデザイン科に入ったんです。マンガで食えなかったら、デザインで食いなさいという親心ですね。

でも、当時は七〇年安保の真っ只中で、学校はバリケード封鎖されるわ、授業もないわで一学期でやめちゃいました。それに角南さんから永井豪先生のダイナミックプロでアシスタントを探しているから、お前やらないかと誘われたんですよ。もちろん二つ返事で行きました。高校を卒業した年の夏です。

永井先生は『ハレンチ学園』や『あばしり一家』を連載していた頃で、僕がなぜ呼ばれたかという、ダイナミックにいた小山田つとむさ

んが「少年サンデー」で連載することになり、そのアシスタントが必要だったからです。ベタ塗りをおもにやっていましたね。時間が空いたら永井先生のお手伝いもしました。徹夜で原稿を仕上げ、近所の居酒屋で朝食セットみたいなものを食べて解散。それでまた昼過ぎに集まって作業、という生活でした。ダイナミックから見ると、僕は集英社から回された若造、という感じだったと思います。永井先生とはそんなに会話はしなかったかな。朝飯をみんなで食べに行つたときに話したぐらいでした。





その頃、神保町の古本屋で新潟のイタイイタイ病の本を見つけて、角南さんにこれをマンガにしたいと言ったんです。その本はイタイイタイ病を告発したお医者さんの手記でした。企画が通ったので、その年の12月にダイナミックを辞めました。そしてイタイイタイ病のマンガに専念するわけです。それが『悪魔の水』。デビュー作です。僕はストーリーマンガ派でした。テーマありきでマンガを描いていましたから。そういう意味で公害問題はとっつきやすかった。「ジャンプ」としても、中沢啓治の『はだしのゲン』がヒットして、その路線を続けたかったんだと思います。

実際、描き始めたわけですけど、それはもう大変でした。計90ページで三回の連載だったんですが、その十倍ぐらいのネームを描きました。



角南さんからは、ほとんど全部のコマに注文をつけられました。「人と人が喋るときに、この位置関係はないだろう」「このキャラクターは本当にこんな性格でいいのか」「ここでなぜ裁ち切りを使わないんだ」といった、ストーリー作りからセリフ、マンガのテクニクにいたるまで本当に細かく指導されました。おかげでボロボロになりました。本当に力尽きたというか。描き上げたあと、しばらく集英社に行かなかつたぐらいですから。もちろん角南さんは僕にマンガのイロハを一から教えようと思っていたわけで、その意味では感謝していますし、すぐくためになったんですが。

文・新つれづれ草第7号掲載「つれづれインタビュー・マンガびと」より抜粋加筆

